

所蔵資料展示

津阪東陽の文事

平成三十年六月十四日（木）～八月十日（金）

三重大学附属図書館



— ごあいさつ —

三重大学附属図書館は館蔵貴重資料のうち津藩藩校有造館の督学（校長）であった津阪東陽に関する書籍を10点選び、所蔵資料展示「津阪東陽の文事」として公開することにいたしました。

先行きの暗い現代の日本を江戸末期にたとえる言説をときおり目にしますが、たしかに似た状況であるようです。1806年に津藩十代藩主藤堂高兌（たかさわ）が久居藩主から津藩主になったときに津藩は借金86万両（8600億円）で、さらに年に2万両（20億円ずつ）の赤字の状態だったと聞きます。高兌は英明な藩主で質素儉約を率先して行い歳出を切り詰め、その一方で灌漑用水を整備し産業の育成にも積極的でした。高兌は1825年に亡くなりますが、津藩の財政再建に成功したそうで、名君だったといえるでしょう。

三重大学の遠い前身ともいえる藩校有造館も高兌の時代の1820年に開設されました。伊賀に残る分校崇広堂も翌1821年に開設されています。藩校の企画を命じられ、初代の督学になったのが津阪東陽でした。津阪東陽は63歳で督学になってから68歳で致仕し、翌年に没しますが、その後も有造館は石川之鞆や斎藤拙堂などを督学にむかえ、優秀な人材を輩出し続けます。

東陽は艱難辛苦、紆余曲折の前半生を送り、成功までの道のりが長かった人物です。尖った人物で敵も多かったためとは聞きますが、その一方で今回の展示の書籍をみると、入門的な書物も多く、また理解させるためにさまざまな工夫を凝らしており、気の細やかな人物だったようにも思えます。津阪東陽の著述としてはほんの一部になりますが、優れた教育者・文筆家であった津阪東陽の魅力を書籍から感じとってもらえればと思います。

平成30年6月 三重大学附属図書館館長 加納 哲

【展示凡例】

書名、読み（ひらがな）、ジャンル、刊・写、書型（サイズ）、巻冊数、編著者名、序跋者、刊行・成立年、版元（出版地）、旧所蔵元、架蔵番号、四部分類の順で記述。

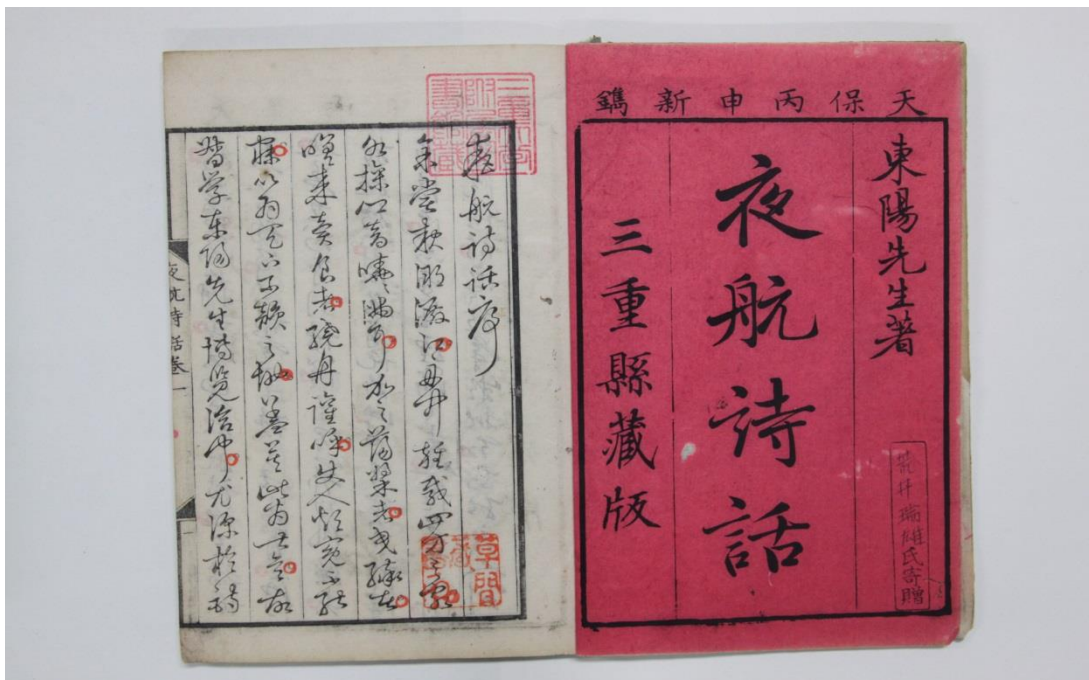
津阪東陽

儒学者・漢詩人・教育者。宝暦 7 年(1757)生、文政 8 年(1825)没。名は孝^{もと}綽^{ひろ}。字は君裕。通称常之進。もともと医学を志したが 18 歳から儒の道へ。23 歳で京に出て、ほぼ独学で学問を修める。33 歳で津藩の儒官となり、以後伊賀で教授にあたる。51 歳で、10 代藩主藤堂^{たかまわ}高^{たか}兌^{まわ}に登用される。藩校有造館設立の建議をし、63 歳で有造館の初代督学となった。東陽の文事は量が多く、多岐に渡る。歴史書・郷土史書、藩校教科書、裁判案文集、教育書のほか漢詩・詩学書を多く残した。

1、夜航詩話 やこうしわ

漢詩文、刊、半紙本、6 巻 6 冊、津阪東陽著、斎藤拙堂序(天保 3(1832))
・自序(文化 13(1816))、明治刊、三重県蔵版、荒井瑞雄寄贈、A919.5.Ts91
集部詩文評類 [附] (巻 5・6 欠)。

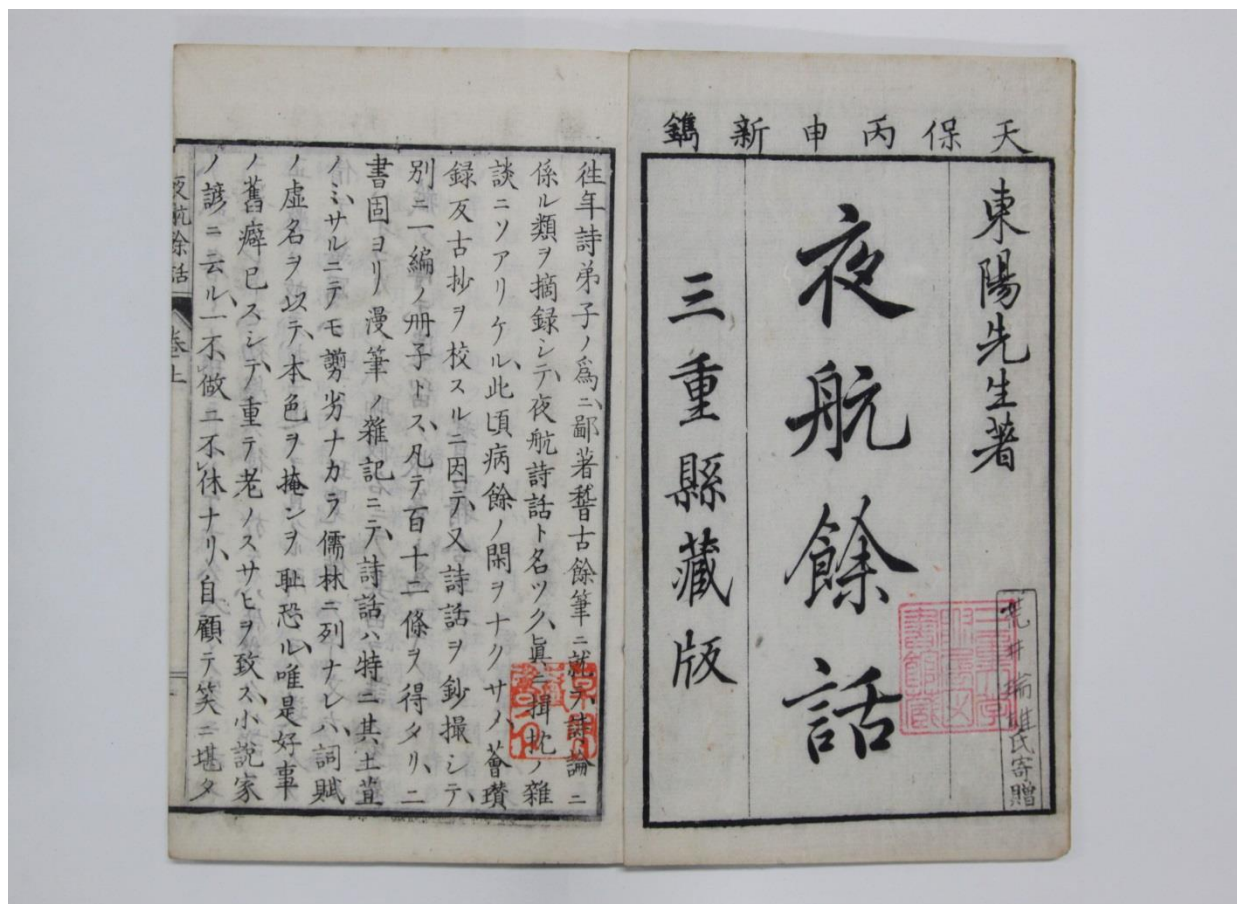
漢文体の漢詩評論集。津阪東陽の著述のうち特に評価されているのは、『夜航詩話』を初めとする詩論書である。序文によれば東陽が江戸より帰任する際に無断で鎌倉に寄ったことをとがめられその謹慎中に執筆されたらしい。東陽は儒学こそ第一で詩は風雅のたしなみという態度をとっており、俗を排除する観点で詩を評価した。序文の「夜航の群坐、偶語紛紛たるごときのみ」(夜行の乗合船でのとりとめない会話のよう)が題名の由来。初版は天保 7(1836)刊に息子の達により、夜航余話とともに刊行された。津藩有造館の蔵版本として制作され民間に販売された。展示の三重大本は明治期の再版本。明治期もよく読まれたといえる。『日本詩話叢書』2 に翻刻。



2、夜航余話 やこうよわ

漢詩文、刊、半紙本、2巻2冊、津坂東陽著、自序、明治頃刊、
(津)木村光綱板、荒井瑞雄寄贈、A919.5.Ts91 集部詩文評類 [附]。

『夜航詩話』の漢文体と違い、『夜航余話』は和文体。上巻がカタカナまじり文、下巻がひらがなまじり文。家塾門弟の教育のためわかりやすさを追求した結果だろう。下巻に漢詩と和歌・俳諧の詩趣を比較する箇所があるのが面白い。俳諧の盛んであった伊勢・伊賀にいたのも背景にあらう。初版は天保7(1836)刊の津藩有造館版で、展示の三重大学所蔵本は木村光綱による再版本。木村光綱は明治期に津阪東陽の本を多く再版した。岩波新日本古典文学大系 65『日本詩史 五山堂詩話』に揖斐高の翻刻と注釈が収録。



3、古詩大観 こしたいかん

漢詩文、刊、大本、縦 25.7×横 18.2 糎、2 卷 2 冊、津阪東陽編、富岡徳章校、
上卷天明 8 年（1788）自序、富岡徳章校、文政 12 年（1829）刊、（京）植村藤右衛門
・（江戸）西宮弥兵衛・（大坂）河内屋儀助・（名古屋）井澤屋和助・（津）美濃屋宗兵衛
板、桂樹館蔵版。下卷、自序・文政 9 年（1826）斎藤謙（拙堂）序・文政 11 年津
阪達序、（京）植村藤右衛門・（大坂）河内屋儀助・他 9 軒、文政 13 年刊、三重高等
農林師範学校旧蔵、921/Ts91/、集部総集類。

上卷は六朝時代の長編叙事詩「孔雀東南飛」の詳注である。「孔雀東南飛」は中国古代詩の
うち最長のもので、漢末の小役人焦仲卿の妻劉蘭芝が姑に実家に追い返され、そこで再婚を
強制されたために自殺し、焦仲卿も後を追ったという内容。下卷は 11 世紀北宋の漢詩集に
収められた「木蘭辞」の詳注。「木蘭」は老病の父の代理で男装して異民族と戦い、自軍を
勝利へ導いた。ディズニー映画「ムーラン」のモデル。

校訂を行った富岡徳章は大門の呉服屋の娘で東陽より五つ下の女弟子だった。



4、絶句類選 ぜっくるいせん

漢詩文、刊、縦 21.0×横 13.3 糎、21 卷 10 冊、津阪東陽編、津阪達
・平松正懿（楽斎）校、文政 7 年（1824）自序、文政 11 年（1828）刊、稽古精舎版、
荒井瑞雄寄贈、A921/Z2/1-2、集部総集類。

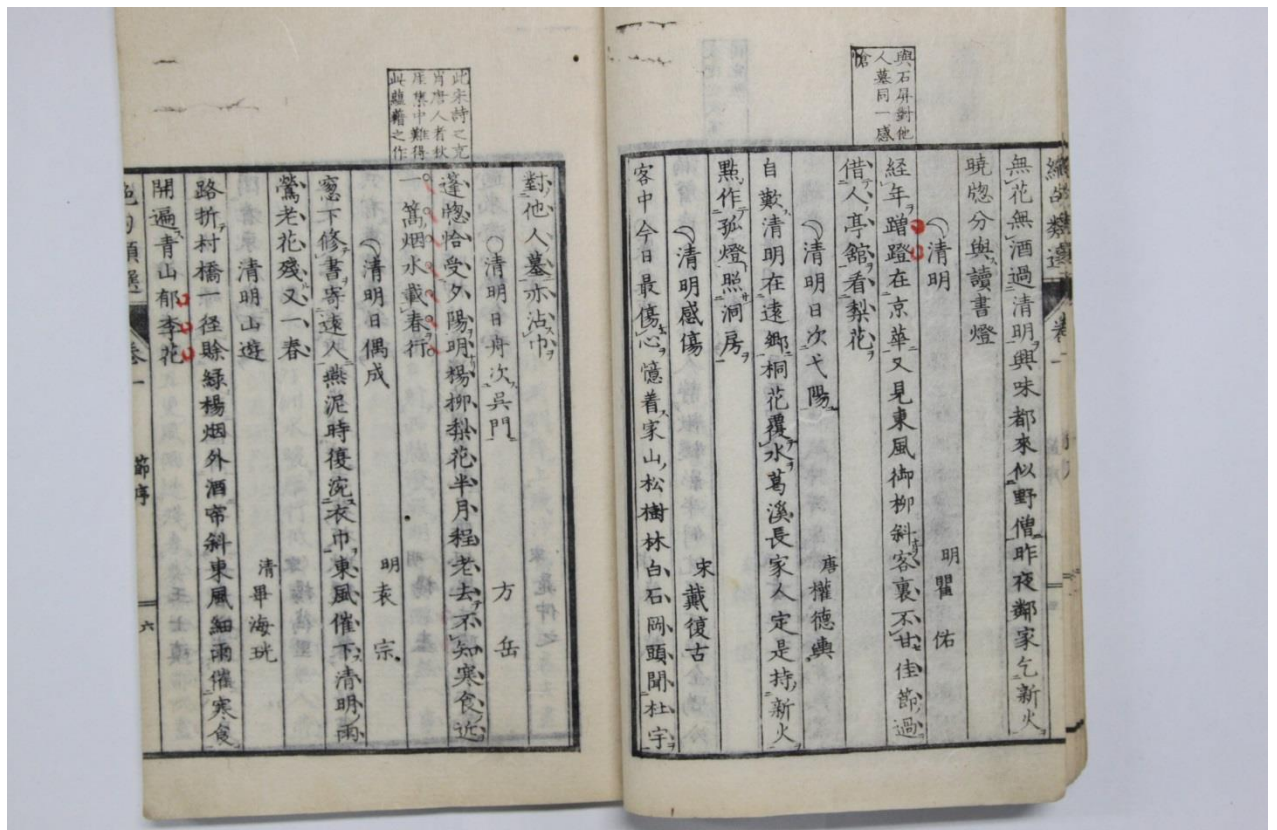
唐代から清代までの七言絶句（絶句は一首が四句からなる漢詩。他に五言絶句がある）
約 3000 首を集めたもの。「宴会類」「閑適類」「遊覧類」など内容ごとに 21 に分類している。
東陽の家塾で学ぶ漢詩の初心者向けの教科書として編まれた。七言絶句に限定したのは、
語数が少なく学びやすいため。現在の作詩も七言絶句から学ぶことが多い。なお東陽は杜甫
の律詩を解説した『杜律詳解』を残している。



5、絶句類選評本 ぜっくるいせんひょうほん

漢詩文、刊、縦 21.9×横 13.7 糎、21 卷 10 冊、津阪東陽編、津阪達
 ・平松正懿（楽斎）校、文政 7 年（1824）自序、万延 1 年（1860）川北長顛跋、
 集部総集類。個人蔵。

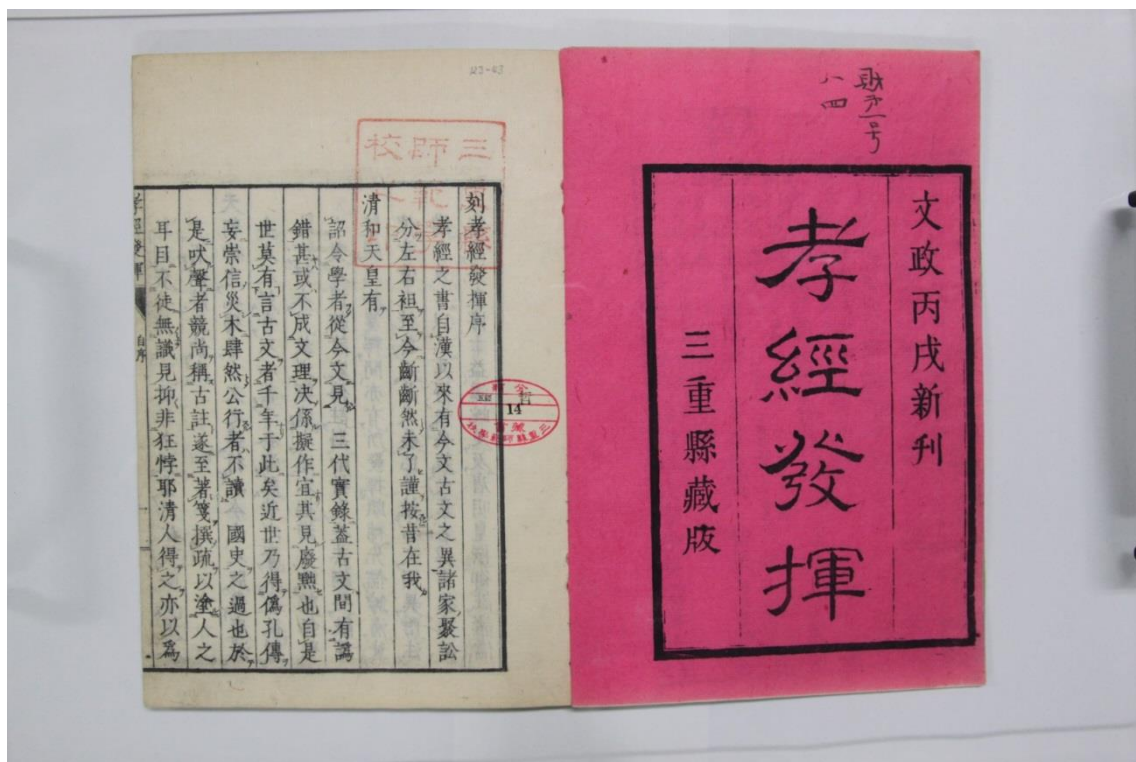
『絶句類選』の欄外に斎藤拙堂が批評を追加したもの。文久 2 年（1862）に刊行されて
 おり、展示本は無刊記で後印本と思われる。跋文によれば、拙堂は『絶句類選』から詩を
 減らしたり増やしたりしようと批評を欄外に加えていた。これは簡単ながら拙堂の詩論が
 わかるものであった。それを知った本屋が拙堂に頼んで出版を依頼したという。本屋の依頼
 で出版に至る経緯を記すのは江戸期の典型的な序跋の形式であり、実際は拙堂が企画に
 積極的に関わったのかもしれない。○は優れた詩。注以外に詩を昼夜でわけて考えているの
 が面白い。



6、孝経發揮 こうきょうはつき

経書、刊、大本、縦 25.8×横 18.0 糎、1 冊、津阪東陽編、明治期刊、木村光綱版、三重県師範学校旧蔵、123. 7/Ts91

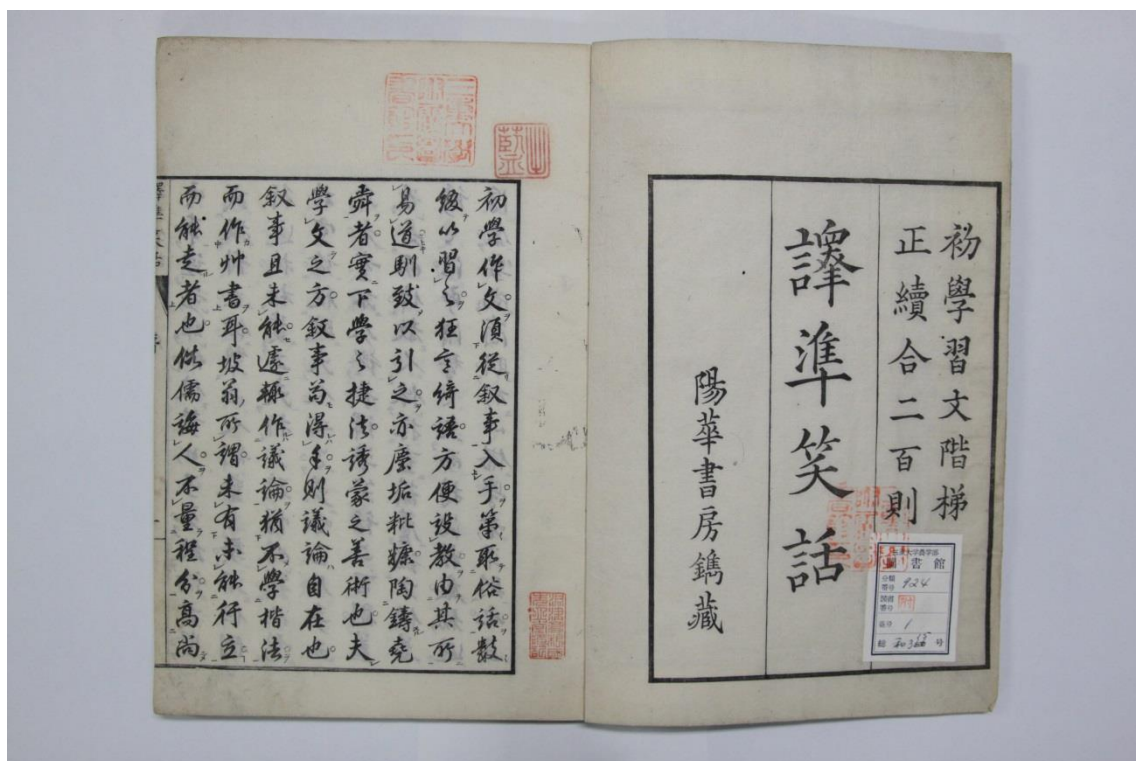
初版は文政 9 年刊で、藩校有造館の教科書として使われた。明治維新以後も少なくとも四度の版を重ねた。儒教の古典『孝経』の注釈書。孔子と曾子の対話により、人倫の大本の徳行である孝の精神を説いたもの。『孝経』には「今文孝経」と「古文孝経」の二系統あり、『孝経發揮』は「今文孝経」を底本とし、「古文孝経」と対照しながら注釈を行った。



7、訳準笑話 やくじゅんしょうわ

漢文笑話、刊、大本、1冊、匏庵癡叟序(文政1(1818))、文政7(1824)刊、
(京都)鉛屋安兵衛・(同)植村藤右衛門・(大坂)柏原屋清右衛門
・(伊勢津)山形屋伝右衛門板、924.1。

中国笑話と日本小咄の漢訳をあわせた漢文体笑話集。全部で198話を収録。序の匏庵癡叟は東陽の別号であり本文も東陽の手になると思われる。序文に「初学文ヲ習フ者ノ為ニ聊カ訳準ノ資ニ充ツル」とあり、漢文学習のため編まれた。落語「火事息子」によく似た咄があり、原拠のひとつと目されている。展示の初版本のほか、大本で山形屋伝右衛門のみを製本所とする文政九年小品堂蔵版本と、半紙本で(尾張)梶田勘助を版元とする文政九年文光堂蔵版本があり、よく読まれた模様。

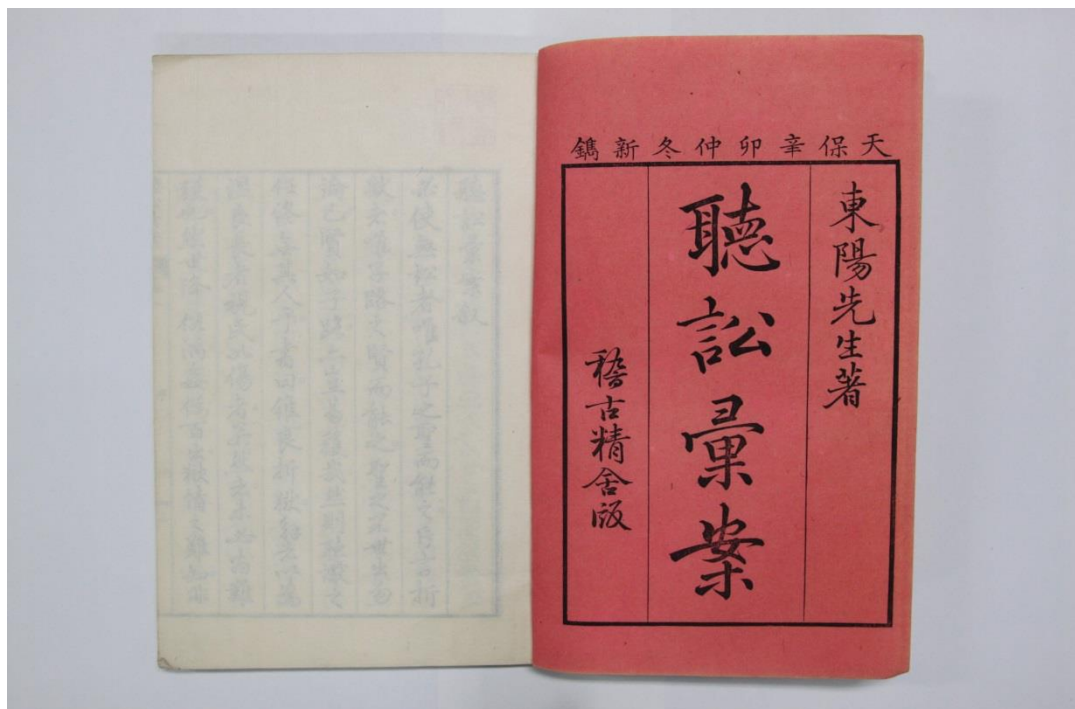


8、聴訟彙案 ちょうしょういあん

法制、刊、大本、3巻3冊、津阪東陽編、津阪達校、自序（文化3（1806））

・斎藤拙堂序（天保2（1831））、川村尚迪跋、天保2（1831）刊、稽古精舎版、322.22.Ts91。

全九十話、中国における裁判の話を集めた漢文体の裁判集。序文によれば南宋の『棠陰比事』を意識して編纂したという。話ごとに漢字四字の題がつけるのは同じだが、類話二話を対比させる『棠陰比事』の形式はひきつがなかった。収録した事例は、殺人、復讐、窃盗など凶悪事件から土地の所有をめぐる争いまで。稽古精舎は東陽の死後に息子である達（号拙脩）が設けた書齋。のちに校訂を加えた有造館版が刊行された。



9、聿脩録 いっしゅうろく

伝記、刊、大本、2巻2冊、藤堂高兌^{たかさわ}撰、徳川齊脩^{なりのお}序・藤堂高兌序（文政1（1818））

・林銜跋（文政12（1829））、津坂東陽後記（文政2（1819））、文政12年（1829）序、

津藩有造館版、三重県師範学校旧蔵、090.91.To18。

津藩主藤堂家の始祖、藤堂高虎の漢文体の伝記。津坂東陽の『太祖創業伝』を増補して、藩主高兌の名で出版した。表紙に藤堂家の家紋葛紋の型押。藩校有造館は『資治通鑑』の出版など歴史編纂事業を活発に進めたがその成果のひとつ。『高山公実録』などとともに藤堂高虎に関する基本資料となっている。翻刻に『補註国訳聿脩録』（昭和5。書庫090.91 To18）。

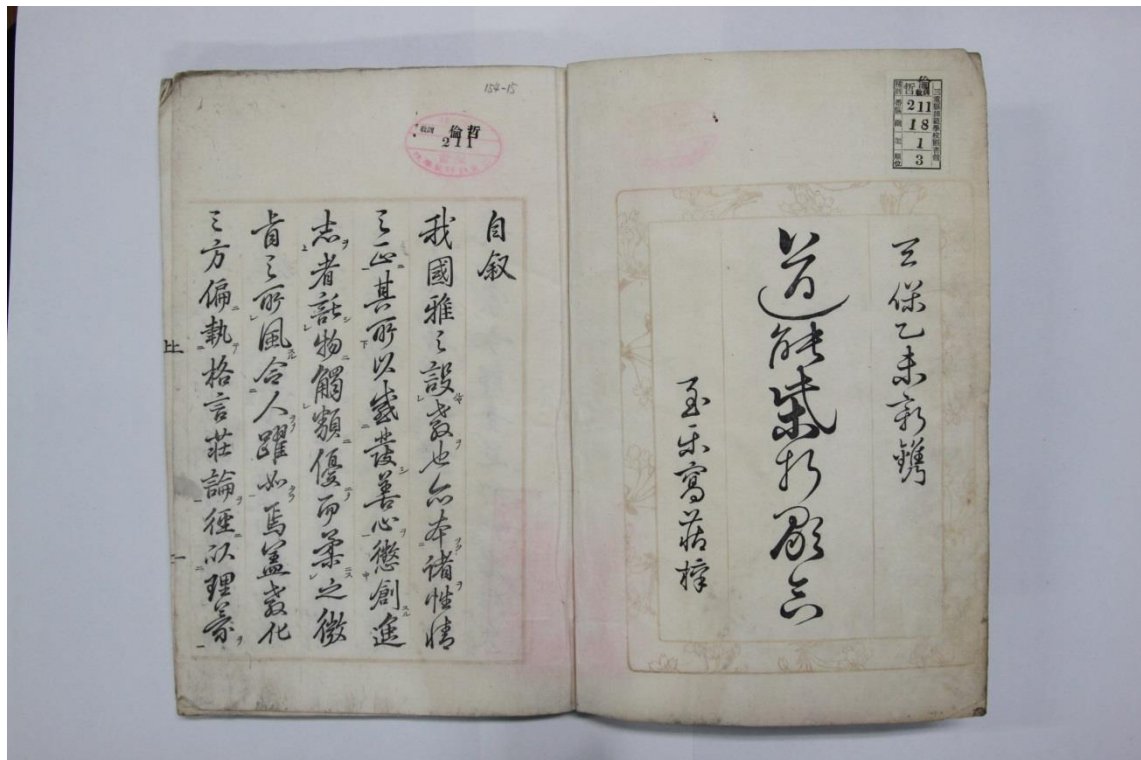


9、聿脩録

10、道の柴折歌合 みちのしおりうたあわせ

和歌、刊、大本、縦 26.5×横 18.2 糎、3 巻 3 冊、津阪東陽編、寛政 8 年（1796）自序、天保 6 年（1835）平松正懿（楽斎）跋、同年津阪達跋、天保 6 年（1835）刊、至楽写荘板、三重県立師範学校・適園文庫旧蔵 159/Ts97/1-3。

もともと東陽が自身の娘ふたりのために教訓的な和歌を集めた『童女庭訓』をもとに編纂した書。歌を二首ずつ掲載し、その趣意を説明する形式をとる。題名は冒頭の「(和歌が)おのづからなさけにめで、^{あはれ}哀にみちびかれて心にかが見、^{おこなひ}行をつつしむべき道の柴折(山道で木の枝を折って作る道しるべ)となりなまし」から(展示見開右)。展示箇所「わりなしや人こそひとといはずともみづから身をや思ひすつべき」(しかたない。他人こそ私をまともな人と行っていないでしょう。でも自分自身を見捨てる必要なあるでしょうか)には旧蔵者の書き込みがある。元歌が『後古今和歌集』の紫式部の述懐の歌であること。「わりなしや」が『雅言集覧』から「物のわきまへもないやう」の意であること。本文「いはずとも」に「いはざらめ」の異本があること(イは異本のしるし)などあり、勉強のあとがうかがえる。



10、道の柴折歌合

【編集後記】

本展示の企画・制作は本図書館研究開発室兼務教員の人文学部吉丸雄哉准教授が行いました。
個人蔵の展示物をのぞいた展示品はすべて附属図書館の所蔵品です。

《参考文献》

- ・『日本教育史資料書 4』「津阪孝緯寿壙誌銘」国民精神文化研究所、1937、
*書庫, 372.1/N 77/4。
- ・津坂治男『津坂東陽の生涯』竹林舎、2007 *開架・図書 121.89/Ts 91。
- ・浅野松洞『三重先賢伝』東洋書院、1981 *開架・図書, 092.08/A 87/1 (初版は
1931-33)。
- ・『津市史』津市役所、1959-69 *開架・図書 215.6/Ts91/1-5。
- ・深谷克己『津藩』吉川弘文館、2002 *開架・図書, 210.08/N 77/61。
- ・岩波新日本古典文学大系 65『日本詩史 五山堂詩話』「夜航余話」揖斐高校注、1991、
*開架 918/Sh64/65。